た。六八年に出された『道子の朝』（盛光社）にもすでにそうした傾向がみられるが、それを強く印象づけたのは、『日本児童文学』に69年10月号から70年10月号にかけて連載され、翌年の日本児童文学者協会賞を受賞した『さらばハイウェイ』（偕成社、七〇）だった。

児童誘拐を扱った、犯罪小説ともいえるこの作品だが、子どもの側の主な登場人物は二人いて、一人は松本守、もう一人は神岡良彦である。守は北海道の開拓農家に生まれたが、一家は離農し、東京に移り住む。開拓地の過酷な労働でリューマチを病む父は人並みに働くことができず、母は内職に精を出している。そんな中、守は少年野球の好投手として期待を集める小学校五年生である。一方、良彦は日本を代表する自動車メーカー新日本自動車の社長神岡彦一郎の孫で、名門のT大学付属小学校に通っている。このおよそ接点のない二人の少年をつなぐのは、タクシー運転手の竹内青年である。高校卒業後上京してきた彼は、美容師をめざす妹を呼び寄せることを楽しみに仕事に励んでいる。その竹内青年のタクシーが、自転車で野球に向かうところだった守をはねてしまうのだ。一命はとりとめるが、守の意識は戻らない。守の急な飛び出しの目撃者がいて、竹内青年の罪は問われないが、彼には納得できないことがあった。とっさに回避しようとしたものの、ハンドルが利かなかったのだ。そうした中、彼が運転していた新日本自動車の車が、ハンドルに問題のある欠陥車であったことが報道される。しかし、事故との因果関係を証明することは難しく、会社も警察もとりあってくれない。新日本自動車の無責任な対応に怒りを燃やした竹内青年は、雑誌で見た社長の孫を誘拐し、人の命の大切さを思い知らせようと決意するのだ。

ここまでの紹介でもみられるように、また守の意識回復に力を尽すベトナム人のハッサン医師の造型なども含め作品の人物配置はきわめて図式的ともいえ、逆にいえばこれだけの図式を、しかも児童誘拐という題材を扱いながら、ともかくも児童文学として提出したことは、当時にあっては衝撃的といえた。

ただ、この作品は、出発期の作品のような「子どもが次代への希望の象徴」といったテーゼへの明確な疑義もしくは異議ではあったが、その〈語り方〉においては、同質のものだったともいえる。僕がそれを実感したのは、その〈語り方〉において六〇年代の作品とはまったく異質な作品にこの後出会ったからで、それは七二年に刊行された安藤美紀夫の『でんでんむしの競馬』（偕成社）だった。

露地には、ときどき、表通りにはおこらない、ふしぎなできごとがおこります。（一行あき）

春は、山陰線の汽車のように、シューッ、シューッと、